

患者を診察する外科の澤崎医師(中央)と宮崎医師(右)＝南砺中央病院



# ベテランで“応急処置”

医師不足により3月末までの1年半、外科手術などができなくなっていた南砺中央病院(南砺市梅野・福光、三浦利則院長)は本年度から、新たに常勤医4人を確保し、外科と耳鼻咽喉科で手術や入院患者の受け入れを再開した。地域医療再生を担うことになった4人は公立病院長や副院長、大学教授などを経験した60代のベテラン。市や同病院によると、こうした人材がまとまって着任するのは極めて異例だ。医師不足を少しでも補うための「苦肉の策」(市関係者)という側面もあり、若手や中堅確保の難しさがあらためて浮き彫りになっている。(南砺総局長・宮田求)

## 元院長や教授4人着任

### 医師不足の南砺中央病院

南砺中央病院の常勤医数は2003年度の17人に対し、11、12年度は5、6人。同病院に医師を派遣してきた金沢大医局からの「供給」が滞っているのが主な理由だ。11年10月から13年3月までの1年半は外科の常勤医がゼロとなり、外科での手術や入院患者の受け入れができなかった。この間、常勤医を確保していたのは16診療科のうち内科と整形外科のみ。三浦院長は「総合病院としての機能を十分發揮できず、どん底の状態だった」と振り返る。本年度着任した4人は外科2人と内科、耳鼻咽喉科それぞれ1人。このうち3人は前任地の病院を定年退職した65歳で、外科の澤崎邦廣・前高岡市民病院長と宮崎仁見・前河北中央病院(石川県津幡町)副院長、内科の山本健一・前金沢大がん研究所長、教授だ。それぞれ手術や外来診療などを受け持つ。外科部長と人間ドック室長を兼務する澤崎医師は「40年近く外科医として

歩んできた経験と人脈を生かし、病院を支えたい」と決意を示す。

この3人の着任が実現したのは、南砺中央病院による金沢大医局への働き掛けが大きい。金沢大附属病院の富田勝郎院長が南砺市福光地域出身である縁を頼りに、田中市長があいさつに出向くなどパイプづくりを進めた。同大医局で富田院長と師弟関係にある

県内では南砺中央以外でも医師不足に陥っている病院が多く、診療科の休止などに追い込まれるケースが目立っている。新卒医師が自由に研修先を選べる新臨床研修制度が2004年に導入された後、自治体病院などへの「医師

### 人材難の県内病院

供給源」となってきた大学医局から都市部に人材が流出している上、各病院で研修医を十分確保できないためだ。あさひ総合病院は08年度に全199床のうち49床を閉鎖し、09年度には平

### 休診・病床閉鎖目立つ

日午後の内科診療が休止に追い込まれた。ほかにも09年度から小児科を休止している富山労災病院などがある。県が昨年4月、24公的病院を対象に行った調査では、13病院で計1222人が不足しているとの結果が出ている。こうした状況から、富山大は県の要望を受け、07年度に県内高校生を対象にした「地域枠」を、09年度には県内医療機関での一定期間の勤務を条件にした「特別枠」を医学部に創設した。県は11年度、医学生が県内病院を見学する際の旅費助成制度を導入。若手医師の呼び込みにも知恵を絞っている。

三浦院長の人脈も生かし、若手や中堅の派遣はなかったものの、同大医局出身のベテラ

ン医師の着任につながった。常勤医は9人に増えたが、医師不足は今も解消されず、常勤医を確保するのは16診療科のうち4科にとどまる。09

年度から外れている救急輸送病院への復帰の見通しも立っていない。三浦院長は「今回着任した4人は経験、知識とも豊富。その人たちから学びたいという若手が集まれば、人材確保の新たな道が見えてくる」としている。